

『詩学』の原因論における「類」と「種」

三 浦 洋

北海道情報大学

Aristotle on the Two Causes of Poetry

Hiroshi MIURA

Hokkaido Information University

平成25年11月

北海道情報大学紀要 第25巻 第1号別刷

## 〈論文〉

## 『詩学』の原因論における「類」と「種」

三 浦 洋

北海道情報大学 情報メディア学部 情報メディア学科 教授

**Aristotle on the Two Causes of Poetry**

Hiroshi MIURA

Professor ; Faculty of Information Media, Hokkaido Information University

【要旨】アリストテレスが『詩学』第4章で提示する詩作発生の「二つの原因」については、大別して二種類の解釈方法があり、バイウォーターらのB解釈では「人間の自然本性である模倣と、模倣の快」、エルスらのE解釈では「人間の自然本性である模倣と、音階とリズム」である。近年、B解釈が優位に立ちつつあるものの、その詳細を検討すると深刻な問題を抱えていることが判明する。それゆえ、E解釈を採る方が理にかなっているのは疑いえないが、E解釈にはエルスの指摘する難点があり、それが従来、B解釈を受け入れにくくしていた。しかし、その難点は、第4章の論述に関する伝統的な誤解に基づいていることから、「類」のレベルから「種」のレベルへと進む論述構造を正しく把握すれば解消できる。よって、エルスの解釈を修正した上でE解釈の正当性を証し立てられ、類的原因と種的原因の提示こそがアリストテレスの意図だったと結論づけうる。

【Abstract】 The two causes of poetry which Aristotle shows in his *Poetics* have been interpreted in two different ways so far. One way is to interpret them as human nature for imitation and pleasure from imitation (the B-interpretation), the other as human nature for imitation and musical scale as well as rhythm (the E-interpretation). Although the B-interpretation has been supported by a increasing number of scholars recently, this paper disagrees with them. If the structure of the chapter 4 of the *Poetics* which includes both levels of genus and species concerning the viewpoint of the research is rightly understood, the E-interpretation will be found correct.

【キーワード】アリストテレス (Aristotle), 詩学(Poetics), 詩作 (poetry), 原因(cause), 自然(nature)

## 1 詩作の「二つの原因」をめぐって

アリストテレスは『詩学』第4章冒頭で、「思うに、総じて詩作は二つの原因によって発生したのであり、それらは自然的な原因である」(Poe.1448b4-5<sup>1</sup>)と述べて原因論の叙述を開始しているが、ここでいわれる「二つの原因」が以下のテキストのどの部分を指すかについては明示していない。そのため、『詩学』が広汎な読者を獲得したイタリヤ・ルネサンス以来、研究者の間では「二つの原因」をめぐって長らく議論が継続されている。解釈の方向は大別して二通りあり、それぞれの立場を代表するバイウオーターとエルスの頭文字を付して「B解釈」、「E解釈」と呼ぶことにすると、B解釈では「人間の自然本性である模倣」と「模倣の快」、E解釈では「人間の自然本性である模倣」と「音階とリズム(韻律<sup>2</sup>)」が原因とされ、第二の原因に関して両解釈は見解を異にする。

このうちB解釈の支持者には、バイウオーターの他にツェラー、デーリンク、ファイフ、ロスタグニ、シクトゥリス、スキアパレリ&クリヴェリらがあり、E解釈の支持者には、エルスの他にモンモラン、ファーレン、タイヒミュラー、ヴァルター、ブッチャー、ハウス、グードマン、ヒースらがいる<sup>3</sup>。近年の動向に限っていえば、ハリウェルやヤンコの論考及び英訳に見られるように、B解釈が圧倒的な優位を確立しつつあり、その影響下にあって、『詩学』の日本語訳においてもB解釈がいわば「定説」として定着しつつあるように思われる。

しかし、B解釈とE解釈のいずれにも問題があるほか、第4章のテキストには、他にも詩作発生の「原因」として数えられる内容が含まれてもいる。したがって、第4章の論述構造をとらえることなしには、「二つの原因」を精確に把握できないであろう。そもそも、なぜアリストテレスが第4章冒頭で「二つ」と原因の数を明示したのか、その意図を考察する必要もあるように思われる。というのも、原因の数をあえて明示せずとも詩作発生の原因論を展開すること自体は十分に可能だからである。

本稿は、以上のような問題意識に根差して考察を進め、E解釈に修正を施しつつ、その正当性を証し立てることを目的とする。テキスト上、主要な考察対象となるのは『詩学』第4章であるが、それに後続する第5章との関連や、先行する第3章までの論述構造をとらえ直すことも視野に入れ、『詩学』の議論展開を見極めたい。その上で、E解釈によって認められる二つの原因が詩作の類的原因と種的原因に当たる点を指摘し、『詩学』全体の基調をなす「類」と「種」の分節に基づいていることを示すのが狙いである。この論点の提示によってこそ、アリストテレスが原因の数を「二つ」とあえて明示した理由も明瞭になるであろう。さらに、B解釈とE解釈が共有する根本的な問題として、第一の原因(詩作の類的原因)が「絵画」の模倣によって例解されている理由についても考察を進め、『詩学』の随所に見られる詩作と絵画の類比が、プラトン『国家』篇の「詩人追放論」と相関する側面についても検討を加えたい。

## 2 B解釈の難点

さて、B解釈の問題から考察しよう。B解釈は二つの深刻な問題を抱えている。第

<sup>1</sup> アリストテレスの著作からの引用箇所はベッカー版の巻・章・頁・行で示した。文中で著作名を別途示していない場合は『詩学』からの引用である。

<sup>2</sup> 「韻律」には暗に「言葉」が含まれている。

<sup>3</sup> エルス(1957)p.74と竹内(1969)p.94を参照。

一に、「人間の自然本性である模倣」と「模倣の快」の二つを原因ととらえるため、専ら「模倣」の原因が述べられていることになり、肝心の「詩作」の原因が不明になる点である。第二に、B解釈のとらえ方では、人間の自然本性に即した活動(その一つである模倣)が快を生じさせるという、アリストテレス哲学に広く根を張る快樂説(hedonism)の内容を分割して二つの原因を立てていることになるため、原因を「二つ」と見なすのが不合理である。

まず、第一の問題を取り上げるならば、B解釈は「模倣」の原因を提示するだけで、「詩作」の原因そのものを説明しない。なるほど、アリストテレスは「詩作(ποίησις)」を「模倣」という類に属する一つの種と見ているから、模倣が発生した原因を提示することは、詩作の発生原因の一端を示すことにはなる。すなわち、人間が本性として模倣を行うことが詩作発生原因の一つであるとは語りうる。しかし、この意味での人間本性を述べるだけでは、言葉や音階(悲劇や喜劇では音楽も含む)、リズム(韻律)を用いる詩作諸ジャンルが人間の世界に発生した原因を十全には説明しない。B解釈に欠けているのは、模倣という類から詩作という種を切り出す「種差」の発生原因についての説明である。

とはいえ、B解釈を採る人々のすべてが「音階とリズム」(1448b20-24)に関するアリストテレスの記述に注意を払っていないわけではない。例えば、バイウォーター<sup>4</sup>とヤンコ<sup>5</sup>は、「音階とリズム」はアリストテレスが「後になってからの再考(afterthought)」で付け足したものだを見る。さらにハリウエルは、「音階とリズムに関する本能は、付け足し的なものではあるが、

先行叙述と密接に関連した要因である<sup>6</sup>」と考える。すなわちハリウエルによれば、第4章の論述意図は、詩作発生の原因の中で最も重要な「模倣の原因」の提示にあるのだから、「第二の原因もまた模倣に関わるものである<sup>7</sup>」というのである。

このようにB解釈では、詩作発生二つの原因が「模倣」の原因に限定されて理解されるため、詩作の「種差」をなす「音階とリズム」に「原因」の地位が認められず、付加的要因と見られるにとどまるところに特徴がある。しかし、こうした見解は、模倣という「類」と詩作という「種」のレヴェル差を弁えていないという意味で、「総じて詩作は二つの原因によって発生した」(Poe. 1448b4-5)という第4章冒頭の一節を無視するものである。「音階とリズム」に付加的な要因の資格を認めるB解釈の論者たちは、「音階とリズム」が詩作発生第二の原因の地位を占める可能性について検討すべきであったと思われる。

次に、第二の問題を取り上げるならば、第4章を読解する上でアリストテレス独自の「快樂説」を顧みる必要がある。というのも、第4章が示す「模倣の快」や「学習の快」など、人間の自然本性に根差した活動がもたらす快の指摘は、倫理学を中心にアリストテレスの思想全体を支える人間観の表明だからである。盲目的な快樂追求を至上命題とする悪しき「快樂主義」とは対照的に、アリストテレスの思想体系では、肉体的な低次の快とは区別された高次の快が、人間の諸活動を促進する要素として提示される。その標準的な典拠を『ニコマコス倫理学』から引用しておけば、「快は、諸活動を完全にし、したがってまた、欲求されるところの生きるという活動も完全にす

<sup>4</sup> バイウォーター(1909)p.127

<sup>5</sup> ヤンコ(1987)p.75

<sup>6</sup> ハリウエル(1986)p.71

<sup>7</sup> ハリウエル(1986)p.71

る」(1175a15-16)のである。とくに、人間の行う活動が本性的な活動、すなわち教示や習慣づけを経ずに生来の能力として可能な活動の場合、その活動は本性に即しているゆえに快をもたらす。すなわち、活動に伴う快は、その活動が人間本性に即していることを証し立てる徴表なのである<sup>8</sup>。したがって、人間が模倣に快を感じることは、模倣が人間本性であることを証し立てるのであって、「人間本性である模倣」と「模倣の快」は一つの事柄の表裏である。それらは相互に循環して、模倣が人間の本性的活動であることを証明する関係にあり、別個独立に成立する二つの事柄ではない。

B解釈の中でも、二つの原因の独立性を顧慮したのがヤンコである。ヤンコはB解釈の細部に独自の知見を加え、第一の原因は人間の模倣本能だが、第二の原因は他者(芸術家)が創作した模倣像から得られる鑑賞者の快だと解釈する<sup>9</sup>。すなわち、前者は芸術家に関連し、後者は観客に関連すると解して、原因が二つに分けられている理由を説明しようとしているが、この解釈にはテキスト上の根拠がない。第4章では、人間の模倣本能が芸術家だけに限られるものとして提示されてはおらず、「すべての人間に自然的に備わっている」といわれている。また、模倣像の鑑賞から得られる快が、芸術家を除外した鑑賞者に限定されることもありえないであろう。芸術家とて他人の作品を鑑賞する場合があろうし、そもそも「すべての人間」というアリストテレスの記述には、芸術家と鑑賞者を区分する視点

が含まれていないのである。したがって、ヤンコの仕方でB解釈における二つの原因の独立性を説くことはできない。

ここで、アリストテレスが詩作発生の原因の数を「二つ」と明示した理由について考察を加えておきたい。アリストテレスが著作の中で、考察主題とする要素の数を明示することは例外的ではなく<sup>10</sup>、『詩学』においてもいくつも見られる。例えば、第1章では詩作ジャンルの種差が「三つある」(1447a16)と明示した後で素材、対象、形態を挙げている。第6章では悲劇の構成要素(筋、性格、語法、思考、視覚効果、歌曲)を枚挙した後、「六つある」(1450a8)と総括したり、第18章では悲劇の種類が「四つある」(1455b32)と述べられた後、複雑劇、受難劇、性格劇、単純劇<sup>11</sup>を列挙している。また、第24章でも、「叙事詩の種類は悲劇の種類と同じだけあるのでなければならない」(1459b8-9)と述べた後で具体的に列挙しているから、要素の数の提示は、具体的な列挙に先立つ場合と後に書かれる場合とがあるといえる。いずれの場合にも、各要素は、それらがそれぞれ別個の原理を持つことに依拠して区別されているから、その意味で各要素は論理的・原理的な独立性を持つといえる。

逆に、第12章での「悲劇の量的な部分」についての記述では諸部分が列挙されながら、その数が後にも先にも明示されない。これは、例えば部分の一つであるコンモス(嘆きの歌)が、すべての悲劇に含まれるわけではなく、作品によって事情が異なるこ

<sup>8</sup> 自然本性ではなく、後天的な経験によって個人の性格が確立された場合にも、ある活動が快をもたらすことは、その活動がその個人の性格に即していることを示すというのがアリストテレスの議論である。例えば、「正義好き」な性格の人は、正義の行為を行うことに快を感じる。

<sup>9</sup> ヤンコ(1987)p.74

<sup>10</sup> 『詩学』の考察主題の一つに「詩作に関わる要素がいくつあるか」(1447a10)を掲げていることからすると、数の明示は偶然でも恣意的でもないと考えられる。

<sup>11</sup> 第4の種類を述べた部分のテキストが破損されているため、様々な推測が行われているが、ハリウエル(1995)p.93はエルスに従って「単純劇」と解する。

とに起因すると考えることができる。

以上より、アリストテレスが要素の数を明示するときには、①数え挙げられる諸要素が原理的に独立した性格を有している、②要素の数が固定的であり、場合によって変動することがない、③冒頭で予示する場合と、論述が進んだ後で総括的に要素の数を示す場合とがある、という特徴を認めることができよう。しかるに、B解釈では二つの原因の原理的な独立性が確保されないゆえ、廃棄されるべきなのである。

このようなB解釈の問題点に目を向ける限り、代替策としてE解釈を採るべき必然性は疑いえないように思われる。だが、E解釈もまた問題を抱えている。次節ではその点を考察したい。

### 3 E解釈の問題と第4章の論述構造

E解釈には、提唱者のエルス自らが指摘する難点がある<sup>12</sup>。それは、第一の原因の説明(1448b5-19)に比べ、第二の原因の説明(1448b20-24)が短く、不均衡であるというものである。説明の長短を問題にするのは、論理的な考察を遂行する上で非本質的な指摘にも見えるが、この難点が、E解釈を受け容れにくいものとし、B解釈支持者を増す一要因になってきたことは否定できない。したがって、エルスの指摘する難点を克服しない限り、B解釈を退けてE解釈を確立する途は開けないといわなければならない。

さて、エルスはE解釈の難点が生じた原因を特定する作業も行い、モンモランの推測に同意する形で結論を導いている。まず、その議論を検証することから始めよう。

エルスは、E解釈について「疑いもなく正しい」と断じつつ、第一の原因の説明(15

行)と第二の原因の説明(5行)の長さが不均衡になった理由を説明しなければならないと述べる<sup>13</sup>。そして、第一の原因の説明に含まれる「証拠」(1448b9)という語に着目し、この語で始まる文の終わり(1448b12)までを数えると、第一の原因の説明は8行だけになるため、不均衡が解消されると考える。そして、この8行(以下、【4-I】)だけが、「もともとアリストテレスが詩作の第一の原因の説明に当てていた部分」(Aristotle's original treatment of the first 'cause' of poetry)と見なし、モンモランの推測に従って、後続する数行(以下、【4-II】)をアリストテレス自身による、一定の時間経過後の加筆と考えるのである。これらの部分のテキストは以下のようである。

#### 【4-I】(1448b4-12)

思うに、総じて詩作は二つの原因によって発生したのであり、それらは自然的な原因である。すなわち、模倣することが人間には幼少期から自然的に備わっているため、他の動物とは違って、最も模倣を得意とし、最初期の学習も模倣を通じて行う。それがゆえに、模倣像を喜ぶこともすべての人間に自然的に備わっている。その証拠は、実際に経験される出来事のうちにある。例えば私たちは、下等動物の姿や死体など、実物を目にするのが苦痛な対象であっても、それを極めて精緻に描いた像を観賞するときには喜びを感じるのである。

#### 【4-II】(1448b12-19)

さらにその原因を考えると、哲学者だけでなく他の人々にとっても同様に、学習することが最も快いという事

<sup>12</sup> エルス(1957)p.127

<sup>13</sup> エルス(1957)p.127-135

実がある（ただ、一般の人々は、学習に携わる時間が短い<sup>14</sup>）。この原因によって模倣像の観賞から喜びが生じるというのは、観賞する過程で「この像は、あれを模倣したものだ」というように推論し、個々の像が何であるのか、わかる（学習する）ことが含まれるからである。もしもそれとは違って、模倣された実物を以前には見たことがないのに快が生じたという場合には、模倣像としての作品がではなく、作品の仕上げ方や色彩、あるいはそれに類する要素など、別の原因が快を生じさせたことになるだろう<sup>15</sup>。

【4-II】について、もともとは書かれていなかった推測することで、第二の原因の説明と（仮想的に）長さを均衡させるエルスの解釈法は、人工的であるだけに三つの疑念を呼び起こす。第一に、人間本性を説明する上での「模倣の快」と「学習の快」の緊密な関係が当初は述べられていなかったことになる。第二に、【4-I】の「模倣像（絵画）」の例と【4-II】の「仕上げ方や色合い」が呼応し合っているにもかかわらず、【4-II】だけが後で書き加えられたことになる。以上の二点は、加筆を否定する決定的な論拠にならないまでも、加筆ではなく当初から【4-I】に続いて【4-II】が書かれたと想像する方が自然だと主張する論拠にはなりえるだろう。第三に、説明の長さの不均

<sup>14</sup> この一節は、プラトンの『ピレボス』篇における「学習の快は苦と混じり合っていないものであって、かつ、多くの人々ではなく、極めて少数の人々だけのものというべきだ」（52b6-8）というソクラテスの台詞に対する反論とも見られる。

<sup>15</sup> この部分は、「何であるか」の知的把握から生じる快と、「どのようなか」に対する感覚的快との対照を示しており、後の悲劇論において視覚効果や音楽など感覚的快が劣位に置かれる議論の伏線となっている。

衡を問題視するのであれば、第一の原因の説明を短縮する方向で検討するほかに、第二の原因の説明を延長させる可能性についても検討がなされて然るべきであろう。というのも、エルスが第二の原因の説明部分を5行だけ（以下、【4-III】）に限定して解釈したのが正当かどうかを問う余地が残されているからである。すなわち、【4-III】に後続する部分（以下、【4-IV】、【4-V】）では主題が変わっているとみなし、詩作の歴史の記述が行われているとするエルスのとらえ方が妥当かどうか、第4章全体の論述構造に即して問い直されなければならないのである<sup>16</sup>。そこで、それらのテキストを引用しておこう。

#### 【4-III】 (1448b20-24)

私たち人間にとって、模倣する行為（第一の原因）に加え、素材となる音階とリズム（詩の韻律もリズムに含まれることは明らかである<sup>17</sup>）もまた自然的に存在するのであり、とくにそれらの素材を扱うことに自然的な素質を持つ人々が存在して、彼らが最初期に即興から始めて少しずつ発展させ、詩作を発生させた。

#### 【4-IV】 (1448b24-27)

しかるに詩作は、詩人たちの性格に従って、大きく二群へと分かれた。すなわち、威厳のある詩人たちは、素晴らしい行為や優れた人間たちの行為を模倣したのに対し、軽薄な詩人たちは、劣った人間たちの行為を模倣した。前者は神々への讃歌や人間への頌歌を、後者は諷刺詩を創作することから始め

<sup>16</sup> エルス(1957)p.125 は第4章を discussions of the causes and history of poetry と見る。

<sup>17</sup> この断り書きから、「言葉」も「音階やリズム」と並んで念頭に置かれていることが明らかである。

たのである。

【4-V】(1448b28-30)

事実、ホメロスより以前に関しては、この種の諷刺的な詩の創作者を一人も挙げられないが、実際には多数存在したと思われる。他方、ホメロス以後に関しては、彼の作とされる諷刺的な詩『マルギテス』をはじめ、それに類似する諸作品が存在する。

引用箇所のうち【4-IV】及び【4-V】以降の部分を「古代文学史」の叙述と解する論者は、エルスに限らない。第4章に「古代文学史」が含まれるとする理解は既に『詩学』解釈の伝統となっている感があり<sup>18</sup>、一部の論者は第4章全体を「文学史的考察<sup>19</sup>」にとらえる。なるほど、【4-IV】以降の部分には「原因」に類する語彙が見当たらないことから、詩作発生の原因論が継続されているとはとらえにくい。内容からして歴史的事実の記述に充てられているように見え、ましてやホメロスへの言及にいたってはそうである。したがって、この記述を歴史的経過の事実と合致するよう修正すべく【4-V】を ποιηταί(1448b34)の後へ移すことを提唱するエルス説<sup>20</sup>にも、一見したところでは理があるように見える。

しかし、【4-III】の5行で詩作発生の原因論が終わり、【4-IV】から「古代文学史」の叙述が始まるとするとらえ方は正当であろうか。このとらえ方こそが、第二の原因の説明が第一の原因に比して「短い」と断ずるエルスの根拠だったのだから、再検討が必要であろう。そもそも、【4-IV】以下を「古代文学史」と見なす論者の中にも、ア

リストテレスの叙述に対して否定的な論評を行う人々が少なくないのだから、再検討は必須である。すなわち、もしもこの叙述が詩作に関する古代文学史だとすると、教訓詩、抒情詩、祝勝歌など古代詩の重要なジャンルがなおざりにされていることになる<sup>21</sup>。したがって、【4-IV】以下が果たして文学史の記述であるのか、また、【4-III】までの論述と【4-IV】以下がどのように関連しているのかが、根本的に問い直されなければならない。

その際、まずもってなすべきは、E解釈における詩作発生の「第二の原因」とは何であるのかを、できるだけ精確に把握しておくことである。E解釈を採る多くの論者は、【4-III】に含まれる「音階とリズム(韻律)」、すなわち詩作の素材だけを「第二の原因」ととらえる傾向を持つ<sup>22</sup>。しかし、同文において「詩作を発生させた」の主語は、音階とリズムに関し「自然的な素質を持つ人々」である。つまり、悲劇創作などに欠かせない作曲や韻文創作の天分を持った人々が、詩作という「種」を生み出したといわれているのである。この人々は、人間全体を「類」と見たとき、詩作諸ジャン

<sup>21</sup> 松本・岡(1997)p.319

<sup>22</sup> ヒース(1996)p.50が指摘するように、リズムと音階が人間の本性だとする見解はプラトン『法律』653d-654aでも述べられている。なお、悲劇などの詩作の素材としてはもう一つ、「言葉」がある。

「言葉」が第二の原因に挙げられていない理由はいくつか考えられるが、エルス(1957)p.133-134が指摘するように、詩作に用いられる韻律は必ず言葉を伴っているわけであるから、具体的な場面での「韻律」には言葉が含まれていると理解される。それは、「詩の韻律もリズムに含まれることは明らかである」(1448b21-22)という但し書きや、「快く響く言葉といったのは、リズム(韻律)と音階を伴った言葉のことである」(1449b28-29)という記述からも支持を得る。「音階」についても純粋な器楽演奏を除けば、歌は音階と言葉を含むから同様に解される。エルス(1957)p.133註34が引証するヴァルジミグリのように「言葉と」という句を挿入する必要はないだろう。

<sup>18</sup> エルス(1957)p.134, 松本・岡(1997)p.319, シアパレッリ・クリヴェッリ(2012)p.619, 竹内(1969)。

<sup>19</sup> 松本・岡(1997)p.319

<sup>20</sup> エルス(1957)p.135-138,142-143



ルに関する生来の才能を種差として持つ「種」のメンバーに当たる。このように、人間全体に対し、詩人たちをメンバーとする部分が「類」と「種」の関係にあることに着目すれば、人間全体が行う本性としての模倣と、模倣に用いられる素材(色・形、音声、言葉、リズムなど)に応じた絵画、音楽、詩作などの諸ジャンルが、やはり「類」と「種」の関係にあることを看取できよう。端的にいえば、人間全体と音楽家が「類」と「種」の関係にあるように、模倣と音楽が「類」と「種」の関係にあるのである。同様に、類としての模倣が種としての詩作に対する関係は、類としての人間全体が種としての詩人に対する関係と相即的である。

したがって、模倣という類の中で詩作という種を発生させる原因は、「音階とリズム」のようなジャンル固有の素材といってもよいし、それらの素材の扱いに天分を持つ詩人といってもよい<sup>23</sup>。アリストテレスの叙述は、かかる素材と詩人との対応関係を的確に表現している。要するに「第二の原因」とは、詩作の主体となる人間(詩人)の側と、詩作の客体となる素材(音階、リズム)の側のいずれからも認められるような種別化の原因(定義上の種差)であるから、その意味で「種的原因」と呼ぶことができよう。翻って、詩作発生の「第一の原因」は類としての人間全体、もしくは人間全体が本性的活動として行う模倣であるから、「類的原因」と呼ぶことができよう。このように二つの原因のそれぞれを「類的原因」及び「種的原因」と解することの正当性は、さらに以下の論点からも根拠づけられる。

【4-I】と【4-II】の関係をあらためて顧みれば、【4-I】において模倣の快が人間

<sup>23</sup> E解釈を採るブッチャー(1951)p.140が第二の原因を「音曲やリズムに対する本能」ととらえているのは正当である。

本性だと説かれるとき、それが「他の動物」から人類を画する観点に立っていることが判明する。続く【4-II】においては学習の快<sup>24</sup>が「哲学者たちだけでなく、他の人々にとっても同様」であるといわれるように、一部の人間ではなく「すべての」人間に備わる類的本性である点が強調されている。すなわち模倣の快と学習の快は、ともに人類の類的本性なのである。しかるに、【4-II】でも「原因」という語が使用されながら、学習の快は三つ目の原因に数えられない。それは、「さらにその原因」という表現が端的に示すように、模倣の快と学習の快は人間本性を原理とする単一の原因系列に属するからにほかならない。かくして、詩作の「第一の原因」たる人類の類的本性に注目させる論述意図を汲むならば、【4-I】と【4-II】の論理的・原理的一体性は疑いえない。よって、ルーカスの提案、すなわちE解釈を採用するには【4-II】全体を括弧に入れた方がよいとする提案に従う必然性はないし、ましてや、エルスとモンモランの推測、すなわち【4-II】は一定の時間経過後にアリストテレスが加筆したものだとする推測を是認する必要もないだろう<sup>25</sup>。また、【4-I】と【4-II】の論理的・一体性は、【4-III】から「第二の原因」についての説明が開始されているとの解釈を、間接的かつ消極的に支持する。

<sup>24</sup> 「わかることの快」と解してもよい。*μανθάνω*は、新たな知識を獲得するという意味で「学習する」の他に、「わかる」、「理解する」の意味も併せ持つ。

<sup>25</sup> エルス(1957)p.129-131は加筆説に関してはモンモランに賛成するものの、加筆部分が「アリストテレス後期の思想」だとするモンモランの主張は受け入れない。よって、加筆だと推測する根拠はモンモランより薄弱なことになる。なお、拙訳「もしもそれとは違って…」以下の文意をめぐっては、様々な解釈が提起されているが、本発表の主旨と直接の関わり合いを持たないため、考察主題としない。ベルフィオーレ(1999)p.273-275を参照。

さらに、【4-III】、【4-IV】、【4-V】において、模倣という類の中で詩作の種差を構成する素材、対象、形態の三つが、『詩学』第1～3章と全く同じ順で提示されていることも注目される<sup>26</sup>。すなわち、第二の原因を述べ始める【4-III】では「音階とリズム」という素材が提示され、【4-IV】では「素晴らしい行為や優れた人間たちの行為」などのような模倣対象が例示されている。その後、ホメロスに言及する【4-V】のくだりは、叙事詩が基となって悲劇が、風刺詩が基となって喜劇が誕生したことを述べているから、叙述の形態から演じる形態への転換が述べられていることになる。かくして、詩作の種差を素材、対象、形態の三つの観点から記す【4-III】、【4-IV】、【4-V】の叙述には論理的連続性が認められるから、【4-III】で詩作の原因論が終わり、【4-IV】から「古代文学史」の叙述が始まるとする、エルスの伝統的解釈<sup>27</sup>は見直されなければならない。そして、従来は「古代文学史」の記述の一部と見なされることの多かった第4章1449a7以降の悲劇についての叙

述と第5章の喜劇、叙事詩についての叙述も再検討されるべきだろう。次節では、その考察に移りたい。

#### 4 第4章における経験的事実の役割

従来、【4-IV】以降の叙述が「古代文学史」だと解されてきた理由は、主に三点ある。①【4-IV】に含まれる小詞 δέ(1448b24)は【4-I】に含まれる小詞 μὲν(1448b4)に呼応しており、しかるに、これらの小詞は文意を対比させる働きを持つから、【4-IV】以降はもはや詩作発生の原因論ではなく、別の主題に移行している。②【4-V】ではホメロスのような歴史的事実への言及が見られるから、理論的な叙述ではなく、経験的事実の記述である。③第4章1449a7以降の悲劇についての叙述と第5章の喜劇、叙事詩についての叙述には「原因」に類する語彙がもはや現れず、内容的にも詩作各ジャンルの歴史的経緯の記述となっている。これら三点について、順次検討しよう。

まず、①については、μὲν(1448b4)に呼応する δέ は他にもいくつか候補があり、少なくとも文法的には一義的に特定できない。すなわち、δέ(1448b9)、あるいは δέ(1448b19)が呼応しているとも考えうる。前者ならば「原因」の叙述と「証拠」の叙述を対比する意味が、後者ならば第一の原因と第二の原因を対比する意味が読み取れる。なお、①に記したように理解する人々の中にも、バイウォーター<sup>28</sup>のようにB解釈を採る立場と、エルス<sup>29</sup>のようにE解釈を採る立場が混在するので、二つの原因の特定に対しては中立的である。問題となるのは、

<sup>26</sup> 従来あまり顧みられなかったと思われるが、アリストテレスがこの順で種差を提示していることには意味がある。というのも、まず、模倣という類の中で素材によって絵画、音楽、詩作などが大きな分類が形成されるのであり、続いて、同じ素材を使用する音楽というグループの中で、模倣される対象の性格の違いによって真面目な音楽とそうでない音楽とが分かれるからである。この仕方により下位の種が生じることを「非同種性」(1448a10)とアリストテレスは呼んでおり、種別化の過程では第一に素材、第二に対象(の性格)が重要な役割を果たすと考えている。それに対し、形態による種別化(例えば叙事詩と悲劇の分岐)については論述の分量(1448a19-23)が少なく、むしろ、形態で区別される複数のジャンルに同質性を強く認めているように思われる。

<sup>27</sup> エルス(1957)はp.145で history, p.134で Aristotle's history, p.136,138,143,147で the development と呼んでいる。ヒース(1996)p.7は Early history と表題を付している。スキアパレリ & クリヴェリ(2012)p.619は history of poetry と呼んでいる。

<sup>28</sup> バイウォーター(1909)p.128

<sup>29</sup> エルス(1957)p.126

小詞の働きに関する解釈を用いて、【4-Ⅲ】と【4-Ⅳ】の間に断絶を認めるのが適切かという点である。この点については、以下の②に関する考察において改めて検討する。

次に、③については、歴史的経過とは逆に、叙事詩の歴史(1449a9-20)が悲劇の歴史(1449a7-31)の後に書かれていることが指摘できる。もしもこれが「古代文学史」の一部ならば、時系列を無視した奇妙な歴史記述ということになるだろう。また、悲劇に関する記述と喜劇に関する記述は  $\mu\acute{\epsilon}\nu$ (1449a7)と  $\delta\acute{\epsilon}$ (1449a32)によって対比されいながら、叙事詩に関する記述は、主題転換を示す  $\mu\acute{\epsilon}\nu \text{ o}\acute{\upsilon}\nu$  によって導かれていることを顧みる必要がある。すなわち、これらの部分では悲劇と喜劇の対比が主要な主題であって、叙事詩はさらに付加的に叙述されているのだから、少なくとも論述構造に特別な解釈を施さない限り、時系列的な「古代文学史」という認定はできないだろう。

さて、最も注意を要するのが②である。

【4-V】に含まれるホメロスへの言及が歴史的事実の叙述に当たることは疑いえない。これが経験的事実のレベルでの記述であることは否定すべくもない。ただ、こうした経験的事実のレベルを、先行する【4-Ⅳ】にも認めてよいかどうか再考されねばならない。というのも、【4-Ⅳ】の「詩作は、詩人たちの性格に従って、大きく二群へと分かれた」、「威厳のある詩人たちは、素晴らしい行為や優れた人間たちの行為を模倣した」などのように概括的な論述は、さらに先立つ【4-Ⅲ】の「自然的な素質を持った人々が…詩作を発生させた」と同様、詩人たちをタイプの的に把握した記述、その意味で概念化されたレベルの記述<sup>30</sup>であ

<sup>30</sup> エルス(1957)p.146-148 は、アリストテレスの「理論的な枠組(theoretical scheme)」のゆえに、叙

って、歴史的实在の固有名を列挙するような経験的事実のレベルとは異なるからである。なるほど、詩作の歴史を主題としている点では連続しているものの、レベルの転換が起こっていることに着目すべきである。

しかるに、【4-Ⅳ】から【4-V】への移行を理解するに当たっては、小詞の組み合わせである  $\mu\acute{\epsilon}\nu \text{ o}\acute{\upsilon}\nu$ (1448b28, 引用では「事実」と邦訳)の機能を考察する作業が欠かせない。この小詞の組み合わせが概念的叙述のレベルから経験的事実のレベルへの転換を示すというのが本稿の仮説であるが、それを述べる前に、エルスの異読を顧みておきたい。

エルスの異読とは、【4-V】のテキストを 1448b34 の  $\acute{\omega}\sigma\pi\epsilon\tau\epsilon\omicron$  の後へ移動するというものであるが<sup>31</sup>、その理由は、移動によってホメロスの出現を叙述するテキストの文意が整合的となり、「古代文学史」の経過に沿うものとなるということにある。すなわちエルスによれば、【4-V】が含む  $\mu\acute{\epsilon}\nu \text{ o}\acute{\upsilon}\nu$  は「主題転換」を意味しており、古代文学史の大きな転換点に当たるホメロスの出現がそこで提示されているというのである。ホメロスへの言及は 1448b34 にも見られるので、【4-V】の移動によって、悲劇及び喜劇が出現した時代とホメロスの時代との間の溝が埋まり、文意がまとまるという。しかし、こうした異読は、【4-Ⅳ】以下が歴史的な経験的事実を述べた「古代文学史」であるという断定に基づいて提唱されているから、むしろ問い直されるべきは「古代

述上、ホメロスの時代と悲劇、喜劇の発生の時代との溝ができてしまうと見る。しかし、アリストテレスの関心は古代文学の発展の経過にはない。詩作の発生原因を述べるという第4章の役割からすれば、時系列的な記述レベルとは別の、理論的叙述が企図されたことになる。

<sup>31</sup> エルス(1957)p.142-143

文学史」と解する読解法の正当性であろう。エルスの異読を採らずとも整合的に解釈できれば、この箇所に関して他の研究者からの異論が少ないカッセルの校訂を生かせることになるだろう。

そこで、見直されるべきは  $\mu\acute{\epsilon}\nu\ \omicron\upsilon\upsilon\nu$  の機能である。エルスのように「主題転換」を意味していると解する場合でも、以下に述べるように理解すれば、【4-V】のテキストを移動させる必要はないと思われる。

すなわち、【4-IV】から【4-V】への移行が「主題転換」に当たるのは、概念的叙述のレヴェルから経験的事実のレヴェルへと転換するからである。より精確に言えば、概念的に述べられた【4-IV】の内容は、【4-V】の経験的事実を「証拠」として正当化されている。すなわち、【4-IV】の「詩作は、詩人たちの性格に従って、大きく二群へと分かれた」という内容は、【4-V】の「ホメロス以後」に大きく悲劇グループと喜劇グループに分かれた歴史的経過、すなわち経験的事実によって正当化されるのである。このようなレヴェル転換の  $\mu\acute{\epsilon}\nu\ \omicron\upsilon\upsilon\nu$ <sup>32</sup>は、『詩学』第6章にも見られ、そこでは、概念的・論理的に析出された悲劇の六つの構成要素について、「実際、少なくない悲劇詩人たちがこれらを使用してきたといえる」(1450a12-13)と正当化されている。このように、論理的な考察によって導かれた結論を、経験的事実の挙証によって正当化する論証方法は『詩学』においてしばしば用いられており(第4章 1448b9-12, 28-1449a6, 第6章 1450a35-38, 第13章 1453a17-22 第14章 1454a9-13)、経験的な領域に定位する際

の、アリストテレスの探究方法ないし論証方法を示していると見ることができる。一般に、アリストテレスにおいて経験的事実の挙証は、第一の原因の説明で用いられた「証拠( $\sigma\eta\mu\epsilon\iota\omicron\nu$ )」(e.g. 1448b9, 1450a35)という語を用いて行われることが多いが、 $\mu\acute{\epsilon}\nu\ \omicron\upsilon\upsilon\nu$  がそれを代替する場合があると認めてよいように思われる。この認定が正しいなら、第一及び第二の原因はともに、論理的考察と経験的事実の挙証という二つの部分から成る論証構造を持っていることになる。

以上をまとめれば、詩作発生の第二の原因(種的原因)を述べた【4-III】、【4-IV】及び【4-V】以降のうち、【4-V】以降は、【4-IV】までに概念的に述べられた内容を正当化するための、経験的事実の挙証である。したがって、ホメロスのように歴史的実在への言及を含むが、「古代文学史」の記述が企図されているわけでは決してない。飽くまでもアリストテレスの論点は、「詩作は、詩人たちの性格に従って、大きく二群へと分かれた」ことを証し立てることにある。二群に分かれ始める初発の要因としてはホメロスの作品の影響が決定的であり、「諷刺詩『マルギテス』が喜劇に対して持つ関係は、叙事詩『イリアス』と『オデュッセイア』が悲劇に対して持つ関係と類比的である」(1448b38-40)がゆえに、固有名が挙げられたのである。しかし、ホメロス後、悲劇グループと喜劇グループの二群は直ちにそれぞれの様式を固定したわけではなく、様々な変遷を経たのち、「本性を獲得したので、遷移を止めた」(1449a14-15)。厳密に言えば、各ジャンルの本性を獲得して様式が固定されたとき、初めて十全な意味で悲劇と喜劇は分かれたといえるから、アリストテレスの関心は、二大分枝の起点であるホメロスと、その終点となる本性の獲得にある。

<sup>32</sup>  $\mu\acute{\epsilon}\nu\ \omicron\upsilon\upsilon\nu$  は「主題転換」の機能を果たしていると解されるが、スマイスの文法書が説明する小詞二語の「複合的な機能(事実を強く指し示す)」、もしくは、デニストンの文法書が説明するように「 $\omicron\upsilon\upsilon\nu$  が  $\mu\acute{\epsilon}\nu$  を強めている」と見なすこともできる。

り、その間の遷移については詳述するを要しないのである。すなわち、文学史の全体的な記述は意図されていない<sup>33</sup>。

このように考えるとき、各ジャンルの性格や様式を述べる第4章後半と第5章が、悲劇グループ（叙事詩と悲劇）と喜劇グループ（風刺詩と喜劇）の対比を中心としており、悲劇グループに含まれる叙事詩については、悲劇との種差が簡単に述べられるにとどまる理由が説明できよう。『詩学』全体を通じて、悲劇グループと喜劇グループの二群を対比する意識があることは論述の随所から知られるが、例えば叙事詩については、「叙事詩」という呼称がほとんど用いられず、「六脚韻による模倣」（1449b21）あるいは「叙述の形態をとり、かつ、韻律を用いて模倣する詩作」（1459a17）といった種

<sup>33</sup> よって第4章は、今道(1972)p.225がいうような「詩の歴史について」ではないし、「悲劇発展の小史」や第5章も「喜劇の小史」ではない。第4章後半の悲劇論は、悲劇が本性を獲得して、ある程度様式が固定化された時期までを簡略に記述して、分化の過程の終点を記して置くことに意図がある。そうしないと二大分裂についての経験的挙証にならないからである。また、第5章の喜劇論には「本性」という語こそ現れないものの、登場人物の劣悪さと滑稽さの関係を述べた冒頭部分は、喜劇が本性を獲得したときの特徴（模倣対象の性格）を記している。第5章末尾の短い叙事詩論は、形態的種差に関する第3章の記述の短さを反映しており、叙事詩と悲劇の差異が本質的には極めて小さいことを表現している。但し書きとして非本質的な差異を追記しておくのが、ここでの記述の役割と思われる。よって、エルス(1957)p.146-148が懸念するような、ホメロスの時代から悲劇及び喜劇の成立の時代までの間に溝があるうとも、アリストテレスの論述の意図（始点と終点に焦点を合わせる）からすれば問題ではない。また、バイウォーター(1909)p.134は「明らかに、アリストテレスは初期ギリシャ詩の発展に関する全体的な見解を持っていたにもかかわらず、我々に対しては最小限を語っている。実際、目下の目的にとっては、まったくもってこれ以上の必要はない」という。『詩学』は「演劇の歴史や考古学に関する書ではない」というバイウォーターの見解は正当であるが、その半面、経験的記述の意味と役割を解明しなければ、不徹底な文学史の記述と見られることは避けられないであろう。

差の表現を用いて指示される<sup>34</sup>。これは、現存する『詩学』が専ら悲劇グループについての論述であり、悲劇グループという類に属する種として叙事詩と悲劇を扱っているからであろう<sup>35</sup>。

かくして、「古代文学史」の記述が意図されたのではないことが判明すれば、古代文学の「重要なジャンルがなおざりにされた」（松本・岡(1997)p.319）、「当を失する」（竹内(1969)p.700）といったアリストテレスに向けられた非難が当を得ないことは明らかである。文学史のように見える経験的事実の記載は、第二の原因たる種的原因の存在を、主に悲劇グループと喜劇グループを分ける種差に関して証拠立てたものなのである。

本稿が明らかにしてきた見解によれば、【4-III】から第5章に渡る叙述の全体は、詩作発生の第二の原因についての説明である。エルスの見立てとは逆に、第二の原因についての説明は極めて長い。既に述べたように、【4-I】と【4-II】が第一の原因についての説明であるから、長さの比較からすれば、こちらの方が短い。しかし、二つの原因に共通する論述構造が判明した以上、もはや説明の長短を問題視する必要がないのは明らかである。エルスが掲げた難点を解消した上で、E解釈の正当性が証明できたことになる。

E解釈の正当性を踏まえ、次節からは、第4・5章と、先立つ第3章までの論述との

<sup>34</sup> 悲劇と叙事詩の種差で最大のものは形態である。演じるか叙述されるかという形態の差異が、韻律の差異に影響しているとアリストテレスは見ているからである(cf.1449a22-28)。種差を形作る様式的特徴としては、素材、対象、形態の順に重要性が劣ってゆくのである。

<sup>35</sup> その意味では、書かれながら亡失したともいわれる『詩学』第II巻が喜劇論を含んでいたという推測には一理ある。アリストテレスが悲劇グループと喜劇グループを別巻としたと考えうるからである。

関係、さらには第6章以降の論述との関係について考察を加えたい。

## 5 自然物の探究方法

既に述べたように、第1～3章の論述展開と第4・5章の論述展開との間には、平行的な構造がある。すなわち、詩作各ジャンル間の種差を提示する際に、素材、対象、形態の順に述べられることである。さらには、種差の提示に先立って類レベルの叙述が行われている点でも平行性が見られる。というのも、第1章では模倣という類のレベルで、総じて詩作は模倣である旨が示されており(1447a13-16)、これはまさに第4章で第一の原因が提示される際の類のレベルと同じである。類から種へと考察主題のレベルが進行する構造は、『詩学』冒頭において「詩作それ自体と、その種について」(1447a8)と予告されているから、アリストテレスはこの論述方針に従っていることになる。

すると、第1～3章において詩作各ジャンルの様式比較を類のレベルから種のレベルへと進む形で論述してきたアリストテレスは、詩作発生の原因論を開始する第4章冒頭で既に類から種と議論を進める計画を持っており、類的原因と種的原因の二つを提示するという意識で原因の数を「二つ」と予示したことが推察されよう。「二つ」という数は事例の枚挙を尽くした結果として析出されるのではなく、挙例に先だって論理的かつ原理的に予示されるのである<sup>36</sup>。このように考えるとき、原因の数が先

<sup>36</sup> 言い換えれば、経験的探究を尽くして原因となる事物を数え上げた結果、最終的に二つの原因があるという結論に達したというのではなく、類と種の分節という論述の視点に基づいてア prioriに、「二つ」の原因があると論理的に推断され

に述べられている理由が十全に理解できよう。本稿第2節で指摘したように、アリストテレスが要素の数を明示するとき、本論に先だって示す場合と、後になって示す場合とがあるが、第4章で「二つ」と示すときには第1～3章を用いた「類」と「種」の分節による論述方法を踏襲しているため、冒頭で示したのである。したがって、第1～5章の論述では一貫して、「類」と「種」の分節が常に意識されていたと推察することができよう。

では、なぜアリストテレスは、「類」から「種」へと至る論述構造を平行的に二度繰り返す必要があったのか。単に、模倣という類の中から悲劇、叙事詩、喜劇、といった種を切り出すだけなら、つまり種別化について説明することだけが目的だったなら、二度繰り返す必要はなかつただろう。というのも、第4・5章の詩作発生論を欠いても、悲劇に固有の種差(言葉と音階と韻律を素材に用い、優れた人物と行為を対象とし、演ずる形態で行う模倣)の提示はできただろうからである。すなわち、第4・5章を欠いても第6章の「悲劇の定義」に接続できただろうからである<sup>37</sup>。

今一度、第1～3章と第4・5章の内容を顧みれば、前者は専ら詩作の構成要素に関する様式に着目して詩作を種別化し、第4・5章は発生原因に定位して種的原因を示している。これらは相互に対応しており、例えば、詩作の種差をなす素材として「リズム、言葉、音階」(1447a22)を挙げる第1

たのである。

<sup>37</sup> 悲劇の定義には様式的な種差の他に「カタルシス句」が含まれているが、そこに含まれる、憐れみ、畏れ、カタルシスについての説明は第5章までに含まれていないから、第3章を閉じた後にすぐ悲劇の定義を示すことも可能であったと考えられる。論者の中には、第4章の内容がカタルシス句と関連するという説を唱える者もあるが、本稿では扱う余裕がない。

章の叙述は、それらの素材に関して天分を持つ人々が詩作発生の種的原因であることを示す第4章の議論(1448b20-24)と精確に対応している。すなわち、第1～3章と第4・5章は、類と種差に着目する論述構造を共有しつつ、前者は分類論、後者は発生論という観点の違いを有しているわけである。これは、アリストテレスの動物学などに見られる探究方法の三段階(『動物誌』491a7-15)のうち、第一段階の「博物誌的記述」と第二段階の「発生原因論」に該当する。

すると、第三段階の「理論的考察」が、『詩学』では第6章以降に当たると解されよう。かかる理論的探究の究極の前提という意味で第一原理となるのが詩作各ジャンルの定義である。類と種差の合成である悲劇の定義が第6章冒頭で提示されていることはそれを示す<sup>38</sup>。『詩学』冒頭が予告する「詩作が素晴らしいものとなるためには、筋がどのように組み立てられるべきかを考察する」という規範的な内容を、第6章以降が担っていると考えるならば、今なお論争的となっている「カタルシス」の働きがその核心部分に当たると推察されるのである。

アリストテレスが詩作(及び絵画や音楽などの創作ジャンル)を自然的発生物と見ていることは、第4・5章の発生原因論に明らかである。二つの原因が「ともに自然的」であるとの主張は、動物やポリス(国家)など、アリストテレスが「自然的形成物」と見なす実在の発生原因を述べるときと同じ

とらえ方をしていることを示しているのである。『詩学』の叙述が「記述的(descriptive)」なのか「規範的(prescriptive)」なのかという古来の問題についても、「博物誌的記述」は記述的な性格が強く、「発生原因論」には理論的な面も含まれるが、「理論的考察」はほぼ規範的であると、さしあたり述べることができよう<sup>39</sup>。

『詩学』の論述の中に、「生き物の美」や生き物が持つ「魂」と悲劇の筋との類比が見られるなど、自然物との比較の視点が含まれていることはギャロップ(1990)らによって指摘されている。しかし、他方では、詩作もしくは詩人の出現を動物や植物の発生のように扱うことを警戒する見解も提示されており<sup>40</sup>、今日まで一致した見解が確立されたとは言い難い。

とはいえ、自然物の探究に関する三段階の方法論が『詩学』に認められる以上、今日「芸術」と総称される人間の営為が、人間の自然本性に根差した、その意味で自然発生的なものであるという芸術観がアリストテレスによって強固に保持されていると見られる。詩作発生の第一の原因が人間全体の類的本性たる模倣であるという理説は、芸術各ジャンルが、天分を持つ芸術家だけによって支えられているわけではなく、人類全体がその発生母体となっているという芸術観を示しているといえる。

しかし、そうした模倣の人間本性を第4章が提示する際、詩作ではなく絵画が例に挙げられていることは看過できない。なぜ、詩作の自然発生を説くのに、絵画の例が用

<sup>38</sup> 悲劇の定義は、悲劇論の帰結としてではなく、悲劇論に先立って提示されている。これは、『デアニマ』第Ⅱ巻における「魂の定義」、『自然学』第Ⅱ巻における「自然の定義」の場合と同様で、アリストテレスの理論的探究の特徴である。すなわち、前提としての定義の正当性は、その後の本論の議論が正当化する形式をとり、定義と議論は相互に循環して互いを正当化し合い、支持し合う。

<sup>39</sup> 博物誌的なジャンルの分類作業にも理論的視点が皆無ではないし、発生原因論でも然りである。ただ相対的には、理論的考察の規範性が強く、それとの比較で前二者はより記述的性格を持つといえよう。

<sup>40</sup> エルス(1957)p.134-135、シアパレリ・クリヴェリ(2012)p.619、バーンズ(1995)p.259-285

いられたのか。その点を次節で考察しよう。

## 6 絵画と詩作の類比——『国家』篇への応答

先に引用したように、【4-I】では「模倣の快」を例証するため、「例えば私たちは、下等動物の姿や死体など、実物を目にするのが苦痛な対象であっても、それを極めて精緻に描いた像を觀賞するときには喜びを感じるのである」と述べられている。すなわち、実物を見るときには不快感を催すような対象でも、それを精緻に描いた模倣像を鑑賞するときには、その模倣の精緻さゆえに快を感じるというのが【4-I】の趣旨である。実物に対する感覚的不快と、模倣像に対する知的洞察の快とが相対的に独立していることを、この例は示しているのである。

しかし、『詩学』の主題からすれば、ここで提示されるべきは人間が詩作に快を感じる理由であるから、証拠を挙げるとしても詩作に言及するべきであろう。アリストテレスの論述を植物に譬えていえば、バラが生えている原因を問われているのに、植物が生える原因を述べ、しかもその例証をユリが生える例によって行っているといった奇妙さを含んでいるのである。なぜ、このような事態になったのか。

人間が具体的に行う模倣は、詩作、絵画、音楽など必ず何らかの種(ジャンル)に属する模倣である。バラでもユリでも、いかなる種にも属さない植物が存在しないように、いかなる種にも属さないような模倣活動は現実には存在しない。現実に存在する事物が種的なものであるというアリストテレスの形而上学を踏まえれば、絵画のような種を示すことでしか挙例を行えないことが判

明しよう。先の植物の例でいえば、いかなる種にも属さない植物を例にとり、発生原因を語ることはできないのである。したがって、【4-I】と【4-II】が絵画を例にとって模倣の快と学習の快を提示しているとしても、議論のレベルは飽くまでも「類」に設定されていることを看過してはならない。ここでは「模倣の快」という、いわば類のレベルの快を示すことに論述の意図があり、各ジャンルに固有の快、すなわち種レベルでの快は第6章以降の論述にゆだねられていることになる。「悲劇に固有の快」や「喜劇に固有の快」が第6章以降の探究課題であることは、この視点からも根拠づけられる。よって、第4章の類レベルの「模倣の快」を、第6章以降の種レベルの「悲劇に固有の快」と単純に重ね合わせることはできない。「類」と「種」のレベル差を弁えなければ、『詩学』の理説を誤解することになる。また、詩作発生について因果的な説明を企てる第4章と、目的論的な観点を含んだ悲劇の定義が与えられる第6章とでは、議論の性格の相違を把握する必要もある。

では、なぜアリストテレスは第4章で「絵画」を例にとったのか。理由はいくつか考えられるが、第一に、絵画(とくに肖像画の類)は、それが模倣像であることを容易に示せる。すなわち、ゴッホの描いたヒマワリの絵がそうであるように、実物が存在し、それを模倣した結果としての模倣像が発生し、実物と模倣像との対応関係に関する認識を明瞭に示せるという利点がある。『詩学』の主題が詩作である以上、多くの種を包括する類レベルの議論での例証は詩作以外のジャンルに拠らねばならないので、さしずめ絵画や音楽が候補となるが、絵画の例は明瞭さで優るのである。第二に、プラトンがいわゆる詩人追放論を『国家』篇



で展開したとき、模倣像の例に挙げたのが寝椅子の模倣像(絵)だったことが指摘できる。プラトンは、この例を持って、模倣像が真実在(イデア)から遠ざかること三番目のもの(寝椅子のイデア、寝椅子の実物、寝椅子の模倣像の順)と断じたのであった。それについてアリストテレスの『詩学』が、詩作の意義を説き、引いては模倣全体を人間本性に即した積極的な活動と見なす論点を交えているから、これが『国家』篇に対する応答であるとの見方は、解釈の差こそあれ、既に研究者の間で共通理解になっているといつてよいだろう。

とすれば、アリストテレスが「絵画」を例にとって模倣の意義を説き、もって詩作の意義をも主張していることは重要である。「絵画」が模倣像の典型的な例であるとの認識はプラトンを継承したものであると考えられるし、そもそも詩作が総じて「模倣である」との認識もプラトンからの影響関係を想定せずには理解できない。というのも『詩学』では、詩作や絵画が模倣に属することは、ごく簡単に示されており、論述の前提となっているからである。つまり、絵画の例を示して模倣の認識論的な問題性を指摘し、もって詩作を否定したプラトンの立論は、絵画の例によって模倣の積極的意義を示し、もって詩作の意義を説いたアリストテレスによって反論されたことになる。

無論、「類」と「種」のレヴェルを分ける論述はアリストテレス自身の自然探究に基づいており、プラトン由来であるとは言いが、『詩学』の随所で絵画と詩作の類比が示されている以上、詩人追放論に反論するアリストテレスの戦略の中に、プラトンの叙述に対する意識があったと考えられる。模倣という類全体の意義を示す戦略に加え、種のレヴェルに降りて、悲劇のよう

に優れたジャンルを挙げ、詩作のジャンルの中には人間にとって意義の高いものがあることを示すのも戦略であったと考えられる。このように理解するとき、『詩学』が悲劇と叙事詩の優劣を比較して前者に軍配を上げていることや<sup>41</sup>、悲劇グループと喜劇グループを大別して比較する意図を持っていたこととも整合する。

以上の論点を明瞭にし得たことをもって、本稿の結論にかえたい。ここまで示してきた内容は、今後、「模倣」に関してプラトンとアリストテレスの見解を比較する際の基盤となりうると思われる。

#### 【参考文献】

- (1) J. Bernays(1857) *Zwei Abhandlungen über die aristotelische Theorie des Dramas*, Brealau
- (2) J. Bernays(1857) *Grundzüge der verlorenen Abhandlung des Aristoteles über Wirkung der Tragödie*, Brealau
- (3) R. P. Hardie(1895), 'The Poetics of Aristotle', *Mind* 4
- (4) I. Bywater(1909) *Aristotle on the Art of Poetry*, Oxford,
- (5) 松浦嘉一(1949)『アリストテレス 詩学』岩波書店
- (6) S. H. Butcher(1951) *Aristotle Poetics* 4<sup>th</sup> ed., Dover
- (7) G. E. Else(1957) *Aristotle's Poetics*, Cambridge, Mass.: Harvard U.P.
- (8) 村治能就(1959)「アリストテレス 詩学」、『世界の大思想 2』河出書房新社
- (9) J. Vahlen (1964, orig. 1885) *Aristotelis De Arte Poetica Liber*, Leipzig
- (10) R. Kassel(1965) *Aristotelis Arte Poetica Liber*, Oxford

<sup>41</sup> これは、プラトンが『法律』で示している見解と正反対である。

- (11) D. W. Lukas (1968) *Aristotle Poetics*, Oxford U.P.
- (12) 竹内敏雄 (1969) 『アリストテレスの芸術理論』 弘文堂
- (13) 今道友信 (1972) 「アリストテレス 詩学」, 『アリストテレス全集 17』 岩波書店
- (14) L. Golden (1976) 'The Clarification Theory of Katharsis', *Hermes* 104
- (15) 藤沢令夫 (1979) 「アリストテレス 詩学」, 『世界の名著 8 アリストテレス』 田中美知太郎編, 中央公論者
- (16) R. Janko (1984) *Aristotle on Comedy; towards a Reconstruction of Poetics II*, Oxford
- (17) E. Belfiore (1985) *Pleasure, Tragedy and Aristotelian Psychology*. *Aristotle Critical Assessments* ed. By L.P. Gerson, Routledge, originally source; *Classical Quarterly* 35,2
- (18) S. Halliwell (1986) *Aristotle's Poetics*, Duckworth
- (19) S. Halliwell (1987) *The Poetics of Aristotle: Translation and Commentary*, London
- (20) R. Janko (1987) *Aristotle Poetics (translation and commentary)*, Indianapolis
- (21) J. Lear (1988) 'Katharsis', *Phronesis* 33, Oxford
- (22) D. Gallop (1990) 'Animals in the *Poetics*', *Oxford Studies in Ancient Philosophy* 8, Oxford
- (23) S. Halliwell (1992)[1] 'Pleasure, Understanding, and Emotion in Aristotle's *Poetics*', *Essays on Aristotle's Poetics*, Princeton U.P.
- (24) S. Halliwell (1992)[2] 'Aristotelian Mimesis reevaluated in Aristotle's *Poetics*', *Essays on Aristotle's Poetics*, Princeton U.P.
- (25) S. Halliwell (1992)[3] 'The Importance of Plato and Aristotle for Aesthetics', in *Aristotle's Poetics, Essays on Aristotle's Poetics*, Princeton U.P.
- (26) E. Belfiore (1992) *Tragic Pleasure: Aristotle on Plot and Emotion*, Princeton U.P.
- (27) Richard Janko (1992) "From Catharsis to the Aristotelian Mean", in *Essays on Aristotle's Poetics*, ed. Amélie Oksenberg Rorty, Princeton
- (28) M. Heath (1992) 'The University of Poetry in Aristotle's *Poetics*', *Essays on Aristotle's Poetics*, Princeton U.P.
- (29) L. Cooper (1992) *An Aristotelian Theory of Comedy*, New York
- (30) M. Nussbaum (1992) 'Tragedy and Self-Sufficiency: Plato and Aristotle on Fear and Pity', *Oxford Studies in Ancient Philosophy* 10, Oxford
- (31) J. Barnes (1995) 'Rhetoric and Poetics', in *The Cambridge Companion to Aristotle*
- (32) S. Halliwell (1995) *The Poetics of Aristotle: Translation, Loeb Classical Library*
- (33) M. Heath (1996) *Aristotle Poetics*, translation, London
- (34) 松本仁助・岡道男 (1997) 『アリストテレス 詩学, ホラーティウス 詩論』 岩波書店
- (35) A. Schiapparelli and P. Crivelli (2012) 'Aristotle on Poetry', *Oxford Handbook of Aristotle*, Oxford